

仁川よ立て、不死鳥の如く

1950年9月16日 仁川にて ビル・ロス

すべてが破壊されて灰燼と歸したこの仁川の港には、万物荒涼たるなかに最高潮の活動が展開されている。なんたる奇妙なとりあわせであろうか。

港の25万の市民はほとんど全部が離散した。しかし波止場からは幾千幾万の軍隊と幾千幾万のトラック、戦車、ありとあらゆる車輛が、陸続として上陸し、瓦礫と化した市内を怒濤のように前線に向かって押し寄せて行く。

町はまだ過去二日間の海陸からの猛攻の悪夢からさめず、黒煙はまだ空一面を覆っている。海兵隊が月尾島に上陸を開始してからもう48時間経ったが、業火はまだあちこちに紅蓮の炎をまきあげている。

わたしは今日の午後、3時間ほど市中をさまよってきた。波止場に面した建物のうちで焼け残ったものは一つもない。商店街に行っても満足に残っているものは一つもなかった。建物という建物はほとんどみな完全に焼き落ちて、壁が焼跡のそこここに立っているだけだった。

しかし市内の西方の山手と中央の一角だけは国連軍の爆撃と艦砲射撃の猛威からまぬがれたようで、ほとんど被害は見られなかった。仁川の住民が一番密集していたのはこれたの地区である。

私がいまごろ廃墟となった街にさまよい出たのはちょっとした個人的回想によるもので、1945年にここに上陸した時に見た立札が今でもあるかどうか確かめなかったからである。その立札には英語で「太平洋の最大良港仁川は諸君の上陸を歓迎す」と書いてあった。たしかここだったと思うところはわかったが、立札は共産軍が引きぬいて捨てたのか、あたりの煙を出している建物の残骸や瓦礫の下になってしまったのか、どこにも見当たらなかった。そのうちに焼跡のそこここから、未だに驚愕の表情をありありと額に浮かべた市民達が、穴から出るもぐらのように現れて来た。通りのあちこちにこうした人達が一人また一人と、とぼとぼ歩んでいるのが見られるようになった。どの人の目つき

もまだおびえて切っている。一体どうして彼らの生活がたちまちにして、こうも変わってしまったのか理解できないといった表情だ。

それでもしばらくすると街のところどころの瓦礫や焼け残った家々に、韓国旗と星条旗が掲げられて風にひるがえり始めた。その数は驚くほど多かった。

海兵と韓国兵はまだ焼跡を駆け廻って敗残兵を狙っている。ときどき銃声が一発二発と聞こえてくる。

市街のあちこちに現れて来た住民達は、爆撃と砲撃に散乱してしまった焼跡を掘り返している。ある街角では焼けてしまったシボレーの乗用車のドアが一つだけ残っているのを、一人の男が開けたり閉めたりしている。私は立ち止まって彼のすることを見ていた。

大通りでは3人の海兵が11人の捕虜を収容所に引き立てていくのに出会った。もと仁川の共産党本部のあったあたりで捕らえたのだそうだ。

住民の中で一番もの怖じしなかったのは子供たちだ。海兵の先鋒が警戒しながら初めて市内に足を踏みしめながら入っていった時、子供たちはもう街に出てきていた。上陸部隊の主力が前進を開始、蜿蜒（えんえん）たる車輛の縦列が行進して行くころは、子供たちはいっぱい群がって来てにこにこしながら手を振っていた。

仁川よ、立て不死鳥のごとく。この灰燼の中から雄々しく立ち上がり、かつての「太平洋最大の良港」の地位を取り戻せ。あゝ、しかしそれが実現するのはいつの日であろうか。

しかし海兵が最初上陸を行った月尾島から市内に向かう途中、私は早くも幾人かの市民たちが健気にも焼跡を取片付け、散乱する木片を拾い集め再建に向かっているのを見たのだ。